日本医史学雑誌第三十巻一号
昭和五十九年一月三十日発行　昭和五十八年九月一日受付

共和政期ローマ軍内の医療従事者について

小林雅夫

はじめに

古代ローマ軍の軍事医学に関する研究は、René Briau の一連の研究[1]以来すでに百年以上の研究史をもっているが、これまでの研究が明らかにしてきたように、ローマ帝国領域内の各地で発見された数多くの碑文（多くは墓碑）は、帝政初期のローマ軍内に医師（medicus）と呼ばれた人々がいたことを示している[2]。このことは、軍医が帝政期の軍隊に編入されていたことを立証しているとみられており、ローマ市民権所有者で編成されるのが原則だった正規軍団にも軍団の医師（medicus legionis）がいたように[3]、おそらく海軍を含めた全軍隊に軍医が編入されていたと考えられている[4]。

同時代の人々から医師（medicus, medicus ordinarius, miles medicus など）と呼ばれ、医療に従事することを任務とし、しかも軍隊内に編入されていた人物を軍医とみなすことができるならば、帝政初期のローマ軍においては軍医制度は定着していたと考えることができる。当時の軍医たちの医学知識の水準は全般的に決して高くはなかったと想像されるけれども、軍医制度や軍事病院（valetudinarium）の発達は、医療問題を軍隊内部で解決しようとしている点では評価されるであろう。だが軍医の地位や任務の内容などについては今なおはっきりしない点も多く、とりわけ軍医制度の起源の問題は未解決のままに残されているように思われる。

帝政期には軍医の存在を立証する史料が確認されているのに対し、共和政期に関する史料には共和政期のローマ軍内に

軍医が存在したことを明確に立証するものはなく、せいぜい暗示的な言及が散見されるにすぎない。それゆえ現在知られている限られた史料だけから、共和政期にも帝政期と同じように軍医が存在したことを立証することは余りにも困難である。アウグストゥス時代（前二七年―）までのローマ軍においては軍医制度は馴染みのない制度であり、組織的な医療体制は欠けていたと認識するならば、ローマの軍医制度は常備軍の創設の際にはじめて採用されたものであろう、という推測は最も理解しやすい考え方ではある。しかしながら軍医制度の起源をどこに求めるべきかという疑問は残されたままであろう。これまでにも帝政期の軍医の起源を解明するための手掛りを求めて共和政期の考察を試みた研究者たちは、いずれも史料の極端な不足に直面した。だが共和政期に関する文献に軍隊内の医療についての言及が少ないことは、軍隊内の医療の欠如を必ずしも意味するものではない。病兵や負傷兵が放置されたままではなかったとすれば、かれらはどのような扱いを受けていたのであろうか。そしてかれらを看病する仕事は軍隊内で重要な任務と考えられていたのであろうか。要するに、これまでに知られている史料だけでは、共和政期のローマ軍における軍医の存在を立証することも、また帝政期の軍医制度に直接結びつく証拠を共和政期の医療体制に見出すことも困難であることを認識するべきであろう。それ故に本稿では、医療をより広い意味に解釈し、傷病兵たちがどのように扱われたかを検討することを通じて、共和政期の医療体制を考えてみたい。

（一）

軍隊は身心健康な戦闘に耐えうる体力を持った兵士たちから編成されていたにしても、兵士たちといえども一般社会における医療問題から無縁だったはずはないし、激しい戦闘や苦しい行軍の結果むしろ数多くの傷病兵が出たはずである。ここでは共和政後期の軍隊内で傷病兵たちがどのように処置されたのかを比較的情報が豊富なカエサル軍を通じてみてみたい。

カエサルはローマ兵の勇敢な戦いぶりを繰り返し語っており、当然激しい戦闘による多数の戦死者や負傷兵についてもしばしば詳しく述べているにもかかわらず、負傷兵たちがどのような治療を受けたかについては全く言及していない。[5] 当時の状況からみて、戦場での戦死者以外にも多数の病死者や負傷者が続出したと思われるから、[6] 軍隊は傷病兵の問題を現実には無視できなかった。そしてカエサルもまた傷病兵の問題に対処せざるをえなかった。それゆえ、かれは傷病兵に対する医学的処置については記述していないが、傷病兵たちがどのように扱われたかについては言及している。

カエサルの報告をまとめてみるとつぎのようになる。戦闘の犠牲者である負傷兵たちは戦闘や行軍から除かれ、休養の機会が与えられるように配慮されており、[7] さらに戦闘に耐えられない傷病兵たちは最初から陣営に残されたり、重傷を負った者が陣営に帰されたりしている。[8] また傷病兵や弱兵が陣営の守備のために残されることもある。[9] そして軍隊が移動しなければならない時には、傷病兵たちは行軍の途中の町に本隊から切り離されて預けられている。[10] このようにカエサルの記述は、傷病兵が放置されたままではなく、保護され、休養の機会が与えられたことを示しているが、対処の仕方はその時の戦況によって異なっていたであろう。いずれにしろ負傷兵が危険な第一線から退き、陣営で休むことが認められている。遠征中に傷病兵たちを途中の町へ預けたり、背後の守備にまわしていることは、おそらくかれらが苦しい行軍に耐えられないためであろうが、かれらが休養によって回復することが期待されてもいるだろう。このように状況が許す範囲内で傷病兵に休養が認められていたと考えられるが、問題はかれらを看護し、治療する人物がいたか否かである。多数の負傷者が包帯をし、荷車で運ばれたり、[11] 高級将校の場合に限られたかもしれないが、担架が使われたとみられる話は、あきらかにその仕事に手を貸した人々の存在を示してはいる。[12] また地方の町に傷病兵が預けられた場合にも、かなりの重傷者もいたはずであるから、当然かれらは町の人々なり、戦友たちなりによって看病されたものと思われる。それゆえ、負傷者を安全な場所まで運ぶ仕事をした人物までも含めたごく広い意味に解釈するならば、傷病兵を看護した人々の存在は想像できる。そして必要な場合には、傷病兵を看病し、治療した人物もいたであろう。しかしながら、かれらはたまたま傷

病兵の近くに居合わせた人々にすぎないのか、あるいは看護や治療を任務とする人々だったのかは全く不明である。その問題についてはカエサルは完全に沈黙している。

カエサルが兵士たちの戦いぶりを描こうとした際に、負傷兵の問題を重要視せず、ましてや医学的処置についての記述に関心を示さなかったにしても当然かもしれない。それゆえ、もはや戦闘員ではない傷病兵の医療問題などは、カエサルにとっても当時の多くの人々にとっても重要な関心事ではなかったと考えられるけれども、同時に当時の人々は、カエサルの言及を待つまでもなく、傷病兵の医療について共通の認識を持っていた、と理解することもできるだろう。そしてカエサルがわざわざそのことを記述する必要を認めなかったのだとすれば、かれの沈黙は必ずしも医療従事者の不在を意味するものではない。[13] カエサルの沈黙の意味は、長い歴史をもつローマ軍の伝統と慣習から切り離して解釈されるべきではない。

（二）

軍隊内における医師の存在を示すものとしてよく知られているのは、将軍たちが個人的に戦場にも連れて行った侍医たちである。[14] かれらの多くはギリシア人医師で、身分は奴隷ないしは解放奴隷であった。従者として戦場にも同行したギリシア人医師たちの仕事はもっぱら主人の世話をすることであったが、時には高級将校たちの看病ばかりでなく、一般兵士の医療に従事したこともあったかもしれない。[15] しかしながら、かれらが一般兵士を対象とした事例があったにしても、そのことはあくまで例外的なことであり、かれらは軍隊に編入されていたわけではない。かれらが軍隊に同行しているのは、一般社会での主従関係がそのまま軍隊内に持ち込まれた結果にすぎない。それゆえ将軍たちの侍医として仕えていた医師たちは軍医ではない。かれらはローマ世界で活躍した奴隷医師たち（servi medici）の一部でしかなく、[16] 軍隊内では孤立した存在であった。かれらの活躍は軍隊内での医学知識の普及に寄与したかもしれないが、かれらは基本的には一般兵

士を対象とした医療の担い手ではなかった。

医療体制が不十分だった初期ローマにおいては、病気や負傷の手当をした最初の人物は本人自身であり、つぎに必要な場合には仲間がお互いに手当し合ったものと思われる。このことは一般社会においても軍隊内でも同じであったろうが、とりわけ負傷兵が孤立しがちな戦場においてはこの傾向が支配的だったはずである。[17] それゆえ兵士たちは負傷の手当に必要な初歩的な外科の知識をもっていたと推測されるが、兵士たちの粗雑な治療法は、ローマ市民が通常身につけていた医学知識と同じものであったはずである。[18] 前五世紀に戦闘を逃れる目的で、負傷兵を装うために無傷の手足に包帯をした兵士たちがいたことは、[19] もしかれらが負傷兵を装うことに成功できると考えたとすれば、包帯をしたのはかれら自身であろうから、兵士たちは包帯を巻くことに熟達していたことになる。またかれらが包帯を簡単に使用できたことは、包帯が手近にあったことを意味している。このことから、おそらく兵士たちは自分が負傷した際に使用するための包帯を戦場に持参し、負傷した場合には自分で手当をするのが一般的だったのだろう。負傷兵を装った兵士についての似たような事例が、カエサルにもみられることは、兵士が包帯を持参するという習慣が共和政末期まで続いていたことを示しているようにも思われる。勿論必要な場合には戦友たちがお互いに助け合ったであろうが、この場合にはかれらはあくまで同僚の兵士であり、少なくとも初期ローマには負傷兵の看護を任務とする特定の兵士がいた証拠はない。

ローマ及びその近隣の町の周辺が戦場となっていた初期ローマ以来、傷病兵たちは近くの町に運び込まれ、町の人々の世話を受けている。その意味では早い時期から、軍隊は前線を離脱せざるをえない傷病兵たちの看護を一般市民に期待しており、また都市の富裕な貴族たちは傷病兵の世話を引き受ける習慣をもっていた。[21] ローマ人の富裕な家庭に奴隷医師が抱えられていたり、ギリシア人の自由人医師がいた場合には、かれらが負傷兵たちの治療に当ったかもしれない。しかしギリシア人医師がローマ人の社会に大量に進出してくるのは前二世紀以後のことであり、イタリア半島以外の土地では時間的にも空間的にも差があったと思われる。いずれにしろ町に預けられた傷病兵は時にはかなりの人数になったであろう

が、タキトゥスが述べているように、[22] 貴族の邸宅が開放され、傷病兵たちが医療品と医者と骨身惜しまぬ市民の看護とを受けることができたとすれば、そのことは当時の兵士たちが期待できる最高のものであっただろう。カエサルもまた遠征中に途中の町に傷病兵たちを預けているが、イタリアから離れた土地でかれらがどれだけの看護を受けられたかはわからないが、おそらくかれらが受けた医療はその町の市民たちが受けたものと同じであったろう。このように傷病兵が本隊から切り離されて町に預けられた場合には、かれらが受けているのはもはや軍隊内の医療ではなく、一般社会の医療である。

ローマ軍は遠征中に傷病兵を預けるに適した町をいつでも確保できたわけではない。軍隊が当面対処しなければならなかったのは、戦場と陣営に倒れている兵士たちであった。Frölich は、第二回ポエニ戦争（前二一八―二〇一年）の頃には、どの軍団にも担架兵がいたことを主張しているが、[23] かれが具体的な出典を明確に挙げていないため、その根拠はあいまいである。Pfeffer もこの見解を踏襲しているが、[24] その理由を述べていない。残念ながらわれわれは担架兵の存在を立証する明確な証拠を持っているとは断言できないように思われる。しかしながら、いくつかの事例[25] から負傷兵を看護したり、運んだりした人々の存在が推測されうるし、負傷兵を戦場から救出するためにも、別な場所へ移動させるためにも担架兵の必要はすぐ発生したと思われるから、時代を確定できなくても、担架兵の登場は推測できることである。ローマ軍の進撃とともに戦場がますます拡大していった時、いつでも侍医や一般市民が負傷兵に救いの手を伸ばしてくれたわけではない。少なくとも共和政後期には、負傷兵を看護したり、運んだりした人々が軍隊内にいたと考えてよいだろう。ただ問題は、かれらがその場限りの未組織な集団なのか、あるいはその仕事を任務とする組織的な集団なのかである。

一般兵士の医療に従事した人物の存在を暗示した最初の言及とみなされているのはキケロ（前一〇六―四三年）の発言である。キケロは古参兵と新兵とを比較して、同じ負傷兵でも経験の乏しい新兵が軽い負傷にも見苦しく嘆くのに対し、老練な古参兵は包帯をしてくれる医師（medicus）を求めるだけであることを述べている。[26] キケロのこの有名な発言をどのように解釈するにしろ、少なくとも負傷兵に包帯を巻く人物がいたことが示されていることと、その人物に medicus とい

う語が使われている点は注目されるであろう。われわれはキケロのこの短い発言より以前には、一般兵士の医療に従事した人物についての具体的言及を見出すことができないがゆえに、キケロの発言には早くから関心を寄せられてきた。ところで、負傷兵に包帯を巻き、かれらを看護する人物というだけなら、われわれはこれまでみてきたことからも、共和政後期の軍隊にはそのような仕事をする人物がいたと考えることができるだろう。[27] 前述のように、問題はそのような人物が誰であるかという点であり、その人物がキケロが medicus と述べている人物と同一であるか否かであろう。

キケロの medicus をそのまま医師と解釈するならば、軍隊内に医師がいたことになる。例えば Haberling は、キケロの medicus は軍隊に同行していた自由人のギリシア人医師であった可能性を主張しているし、[28] Byrne は、将軍の従者だった医師の活動範囲が兵士たちを対象にするとこまで拡大されたのだと考えている。[29] もしそうだとすれば、この人物はギリシア人医師であることになり、以前は奴隷医師だった可能性もある。そしてキケロの発言は、medicus が包帯を巻きにくることを古参兵が当然のことと考えていたような印象をわれわれに与えるから、当時の軍隊内ではギリシア人医師が一般兵士の医療に従事することが普通になっていたという推測が成り立つことになる。しかしながら、もし共和政期の軍隊の医療を支えていたのはギリシア人医師であったと考えるとすれば、極端な場合には、前に述べた看護の仕事をした人々がいずれもギリシア人であったとみなければならず、軍隊は余りにも多くのギリシア人を抱え込んでいたことになるだろう。あるいはキケロの場合だけがギリシア人医師であり、あくまで例外だったのだろうか。これに対して、Scarborough は、ラテン文学に登場する medicus の意味が多様であることを指摘し、medicus は狭い意味での医師ばかりでなく、もっと広い意味で幾分か医学知識をもっている人物を指していると理解すべきであると主張している。[30] もしこの解釈が正しいならば、キケロの medicus は必ずしも医師ではなく、多少でも治療技術にすぐれたローマ兵である可能性がある。しかしながら、medicus の意味があいまいであり、その人物が医師とみなすほどの専門家ではなかったにしても、他人から medicus と呼ばれたからには、その人物は単なる普通の兵士ではなく、医療に関与した人物であったと考えなければなら

ないだろう。

キケロは詳しい説明を全く述べていないから、キケロの medicus が誰であるかを決定することは非常に困難である。それがギリシア人医師であった可能性が全くないわけではない。ローマ世界におけるギリシア人の進出とともに、この時代にギリシア人の自由人医師が軍隊に同行していたことは十分ありうることである。しかしローマ人の medicus 観からみて、medicus をすべてギリシア的な意味での医師と考える必要がないことも確かだろうし、軍隊は一般兵士の医療のために十分なギリシア人医師を確保していたと考える必要もないだろう。われわれは、すでに軍隊内で高度な医療がおこなわれていたという情報を全く持っていない。われわれが推測できることは、傷病兵に包帯をしたり、かれらを運んだり、看護したりした人々がいたであろうということだけである。侍医としてばかりでなく、どういう立場であったかは不明ながら、自由人のギリシア人医師もまた軍隊に同行していたにしても、かれらだけで一般兵士の医療に対応できたとは考えられない。むしろ、ギリシア人医師が治療の対象としたのはごく少数の人々であり、軍隊内の医療は全般的には決して高度な医学水準のものではなかったと考えるべきだろう。一般兵士を看護していた人々は決して専門医師ではなかったろうが、かれらが medicus と呼ばれた可能性もないわけではない。おそらくかれらは負傷兵の傷の手当をする程度のことしかできなかったかもしれないが、それでもかれらは傷病兵を看病したり世話したりする任務を持った兵士たちであったとすれば、その点では他の兵士たちと区別されることもありうることである。

むすびに

われわれが得ている乏しい情報からみる限り、共和政期の軍隊に軍医制度が存在したと考えることはできない。しかしローマ軍は、度重なる戦闘の体験から獲得した成果であるかもしれないが、傷病兵に対して次第に効率のよい看護体制で対応してゆく方向を辿ったものと思われる。伝統的にローマ兵は自分で自分の身体を守るのが原則だったかもしれない

が、負傷で脱落せざるをえない兵士たちを看護する集団が形成されていったのであろう。かれらはおそらく兵士たちの中から選ばれた人々で、看護を任務とする医療班のような組織に発展していったものと推測される。そして一般兵士の多くは、負傷した際にギリシア人医師の手に託されたのではなく、看護兵とも呼ぶべき兵士たちの世話を受けたのであろう。これらの兵士たちは医学の専門的教育を受けた人々とは思えないので、われわれはかれらの治療技術を高く評価することはできないけれども、軍隊組織の点では外部のギリシア人医師を軍隊に編入することよりもはるかに馴染み易かったように思われる。戦場が故郷に近かった時はともかく、戦線は拡大する一方で、軍隊は孤立しがちになるにつれ、ローマ軍は軍隊内部の医療体制を整えざるを得なかったはずである。そして外的要因に迫られるにつれて、ローマ軍は持ち前の組織力を発揮していったのであろう。

帝政期の軍医に関する情報も、軍医の名称が定まっていなかったらしいことなどから、軍医制度がそれほど古いものではなかったのではないかという印象をわれわれに与える。一世紀のものと推定されるある墓標は、[31] 外科用器具を納めた小箱を描いた浮彫を残しているため軍医の墓標と推測されているにもかかわらず、第十一軍団の軍医と思われる Satrius Rufus は medicus ではなく、単に「軍団の兵士」(miles legionis) とだけ書かれているにすぎない。このことは、おそらくこの人物が軍団に編入されている兵士であったことが重要視されたためであろう。ローマの軍医制度が確立するためには、ギリシア人医師の活躍やヘレニズム軍からの影響は当然考慮されなければならない。しかしながらローマ軍の軍医の起源を共和政期の軍隊に同行していたギリシア人医師に求めるべきではないように思われる。共和政期の軍隊内に形成されつつあった看護を任務とする兵士の集団と軍医制度を直接結びつける証拠をわれわれは持っていないにしても、共和政期の軍隊内の医療体制がやがて軍医を登場させる下地を準備しつつあったことは窺えるであろう。共和政期と帝政期とを問わず、ローマ軍内の医療の特徴は、医学水準の高さにではなく、軍医制度と軍事病院とを発展させていった組織力にある点が注目されるであろう。

注

(1) Briau, R., *Du service de santé militaire chez les Romains* (Paris 1866); *L'assistance médicale chez les Romains* (Paris 1869); "L'introduction de la médecine dans le Latium et à Rome", *Revue archéologique* (1885).

(2) *Cf.* Gummerus, H., *Der Aerztestand im römischen Reiche nach den Inschriften* (Helsingfors 1932). 軍医に関する碑文の多くは、一—三世紀のものと推定されている。

(3) 拙稿「軍団の医師とローマ人の医師観」(史観一〇七冊、一九四—二一一頁) 参照。なおローマ軍の軍医に関する諸研究のうち、筆者が利用できた主要文献は前掲論文の〔注〕に挙げてある。

(4) *Cf.* Marquardt, J., *Römische Staatsverwaltung*, II (Leipzig 1884, New York 1975), 554–556; v. Domaszewski, A., *Die Rangordnung des römischen Heeres* (Bonn 1908), 45.

(5) *B.G.* (=*de Bello Gallico*), I 50; II 25–27; III 4; IV 12; 15; 32; 37; V 9; 15; 35–37; 40; 45; 52; VI 36; 38; VII 41; 50–51; 80; VIII 41; 43; 48; *B.C.* (=*de Bello Civili*), I 45–46; II 35; 42; III 9; 44–45; 53; 63–64; 78; 87; 94–95; 101; 106; *B. Af.* (=*Bellum Africum*), 21; *B.H.* (=*Bellum Hispaniense*), 9; 12; 15; 20; 23; 31; 38.

カエサル (前一〇〇—四四年) はガリアで八年間 (前五八—五一年) 戦ったが、『ガリア戦記』はその戦いの記録であり、おそらく五二年の秋から冬にかけて書かれたものと思われている (第八巻はヒルティウスの作)。『内乱記』は、前四八年の末以後、つまりポンペイウスとの戦争終了後に書かれたものという推測が有力である。また『アレクサンドリア戦記』はヒルティウスの作とも思われるが、『アフリカ戦記』と『ヒスパニア戦記』は著者不明である。なお、『ガリア戦記』『内乱記』からの引用は、国原吉之助訳『カエサル文集—ガリア戦記・内乱記』(一九八一年筑摩書房) を参考にした。

(6) *B.C.* III 87; Livius, ix, 32, 12; Plutarch, *Antonius*, 50; Dionys. Halicarnass., VIII, 65, 3.

(7) *B.G.* I 26 では、負傷兵の看護や死者の弔いのために三日ほど出発をおくらせているし、*B.C.* III 75 では、急いで移動することになった時にも、負傷者と病人は配慮されている。また *B.G.* III 4 では、負傷兵にすら持場を捨てて養生する機会が与えられなかった、と述べられているが、これは激戦のためにその余裕がなかったからで、本来なら第一線から退いて、休養することが許されたことを意味している。また *B.C.* II 35 には、多数の負傷者とともに、負傷兵といつわって危険な陣営から逃れた多数の兵士たちがいたという話があるが、このことは負傷兵が第一線から後退することが一般に認められていたことを意味するし、さらに兵士たちが負傷兵を装うことに成功したことをも意味しているだろう。

(8) *B.G.* Ⅵ 36. 陣営には相当数の病兵が残っていたが、その後かれらのうち三百人ほどの兵士が分遣隊をつくって出発している。*B.G.* Ⅵ 38. カエサルの下で首位百人隊長を務めたことのあるバクルスは病人として陣営に残っていた。……かれは絶食をはじめてその日が五日目だったが、自分と全員の運命に不安を抱き、武器を持たずにテントから出てきた(Erat aeger cum praesidio relictus Publius Sextius Baculus, qui primum pilum ad Caesarem duxerat,... ac diem iam quintum cibo caruerat. Hic diffisus suae atque omnium salutí inermis ex tabernaculo prodit)。*B.G.* Ⅷ 48. 騎兵隊長は重傷を負って、生命の危険がありそうに思われたので、陣営に帰ってくる。

(9) *B.C.* Ⅰ 64. 弱兵たちを一個軍団とともに陣営の守備に残しておく。*B.C.* Ⅲ 101. 一部の軍団古兵が病気のために艦隊守備として残っていた。

(10) カエサルはアポッロニア地方で負傷兵を預けることを実行している(*B.C.* Ⅲ 78: quique erant ex vulneribus aegri depositis, per Epirum atque Athamaniam iter facere coepit.). *B.C.* Ⅲ 87 には、病気を口実にブルンディシウムに残留した兵士たちがいたことが記されている。*cf. B.C.* Ⅲ 106.

(11) *B. Af.* 21, 3: Labienus saucios suos, quorum numerus maximus fuit, iubet in plaustris deligatos Hadrumetum deportari.

(12) *B.H.* 38, 2. lectica は輿(こし)のようなものかもしれない。

(13) 例えば、*B.G.* Ⅵ 38 の場合、バクルスの傍に、かれを看病していた人がいた可能性があるだろう。*cf.* Jacob, O., "Le service de santé dans les armées romaines", *L'Antiquité classique* 2 (1933), 326.

(14) Plutarch. *Caesar*, 34, 3; *Cato Min.*, 70; Suet. *Augustus*, 11; *Caesar*, 4.

(15) ローマの将軍の兵士に対する配慮を想起すれば、自分が抱えていた医師を提供したことは十分ありうるだろう。Velleius Paterculus, Ⅱ, 114, 3: iam medici, iam apparatus cibi, iam in hoc solum uni portatum instrumentum balinei nullius non succurrit valetudini.; Plutarch. *Antonius*, 43; Tacitus, *Ann.*, Ⅰ, 69; Polybios, Ⅲ, 66, 9.

(16) 拙稿「古典古代の奴隷医師について」(科学史研究 一四一号) 参照。

(17) Byrne, E.H., "Medicine in the Roman Army", *Classical Journal* 5 (1909), 267; Haberling, W., *Die altrömischen Militärärzte* (Berlin 1910), 5-6.

(18) 当時のローマ人の家長の医学知識は大カトー(Cato, 114-115; 127; 156-160)が述べているような程度のものであったろうが、ローマ兵もまた当然同じような知識を持っていたと思われる。Scarborough, J., "Roman Medicine and the Legions: A Recon-

sideration," *Medical History* 12 (1968), 255. *cf.* Seneca, *Epist.*, XCV, 15: Medicina quondam paucarum fuit scientia herbarum, quibus sisteretur fluens sanguis, vulnera coirent.

(19) Dionys. Halicarnass., Ⅸ, 50, 5: *κατεδήσαυτο γὰρ αὐτῶυ οἱ πολλοὶ τοὺς ὑγιεῖς χρῶτας ὡς τραυματίαι·*

(20) *B.C.* Ⅱ 35.

(21) Livius, Ⅱ, 14, 9; 47, 12; XL, 33, 1. *cf.* Ⅱ, 17, 3-5; ⅩⅩⅡ, 7, 3; 52, 7; 54, 1-3.

(22) Tacitus, *Ann.*, Ⅳ, 63.

(23) Frölich, H., "Ueber die Kriegschirurgie der alten Römer", *Archiv für klinische Chirurgie* 25 (1880), 291 f.

(24) Pfeffer, M.E., "Krankenversorgung der Soldaten und Alterssicherung der Kriegsinvaliden und Veteranen in der griechischen und römischen Antike", *Wehrwissenschaftliche Rundschau* 5 (1968), 292 f.; Pfeffer, *Einrichtungen der sozialen Sicherung in der griechischen und römischen Antike* (Berlin 1969), 99.

(25) Caesar, *B. Af.* 21, 3; *B.H.* 38, 2. また Plutarch. *Antonius*, 45 では、軍隊が饑餓に襲われたのは穀物を挽く道具が不足したためであるが、道具が多く乗てられたのは、駄獸が死んだり、病人や負傷者を運搬したためである、と述べられている。荷車で傷病兵を運ぶ際に、かれらを世話した人物がいた可能性はあるだろう。

(26) Cicero, *Tusc. disput.*, Ⅱ, 16, 38: ...., medicum modo requirens a quo obligetur.

(27) 包帯を巻く人物の存在が暗示されている点では Silius Italicus, Ⅵ, 68-69 も同様である。*B. Af.* 21, 3; *B.H.* 38, 2.

(28) Haberling, 10.

(29) Byrne, 269.

(30) Scarborough, 256.

(31) Liebl, H., "Zum Sanitätswesen im römischen Heere", *Wiener Studien* 24 (1902), 382: [...S]atr[ius...f(ilius)] (tribu) Cam(ilia) Rufus Ravenna miles leg(ionis) XI C(laudiae) P(iae) F(idelis) (centuria)....

Medical Service in the Roman Army in the Republic

by

Masao KOBAYASHI

It is generally known that there were surgeons in the army in the Roman Empire, because numerous inscriptions found throughout the empire have frequent references to *medicus legionis* or *cohortis*. However, there is no mention of the *medici* and *valetudinaria* in the descriptions of the Roman army in the Republic. Therefore we may conjecture that in the Roman army until the time of Augustus there was no trained doctor available for the common soldier and an organization of an official medical service was neglected.

By whom and how were the sick and wounded cared for in the centuries preceding the imperial era ? This paper treats whether or not there was a corps of soldiers deputized to care for the wounded.